三

碁盤の目状に町割りされた小倉城下でも、永照寺のある京町界隈は最も商いが盛んな地域であった。表通りには呉服屋、小間物屋、太物屋、袋物屋などが並び、辻を曲がると魚屋や八百屋が店仕舞いをしようとしていた。

「旦那、いいかい、腕に自信がなきゃあ、赤間の唐太夫と出入りが噂されている岩田屋なんぞに顔出すんじゃないと。贅沢さえ言わなきゃあ、稼ぎなんてどこでも転がっているからさ」

おまつが永照寺の裏手に回る路地の暗がりで言った。

「おまつさん、ありがたい。だがな、背に腹は替えられぬ事情があってな」

「ならばさ、出入りになったら、声だけを張り上げてさ、後ろのほうで動き回っているのさ。決して侠気なんぞ出して斬り合いをしちゃいけないよ」

「相分かった」

永照寺の裏手にふいに紅灯の里が出現した。だが、それは長崎の丸山遊郭に比べようもない寂しい明かりで、どこか日陰の花を思い起こさせた。

「岩田屋の旦那の新妓楼は、九州筋では古手の色里らしいがねえ、こう湿っぽくちゃ男も寄り付かないよね」

おまつも初めて足を踏み入れた様子だ。

「それで海辺に近い処に新しい遊里を造ろうとしているのか」

「それが善兵衛のけちのつき始めさ」

四、五軒の二階家が明かりを点し、張り見世に遊女たちが座って通りを見ていた。

だが、まだ刻限が早いせいか、声をかけるでもなくおまつと一緒の磐音を黙って通した。

新妓楼は、間口五間の総格子の立派な二階家だ。だが、張り見世には女の姿はなくがらんとしていた。

その代わり、土間に酒樽が置かれ、場違いにも食い詰めた浪人者が五人、黙したまま酒を飲んでいた。どことなく覇気がない。

「ほんとに訪ねる気なのかい」

「おまつさん、気をつけて戻られよ」

磐音の案内してくれたおまつに礼を言うと敷居を越えた。

浪人たちの荒んだ目が磐音を睨んだ。

「善兵衛どのにお会いしたい」

「おぬしもこの家に雇われにきたのか。先着が五人おるで雇われるはなかなか難しいかもしれぬな。諦めるなら今のうちだぞ」

浪々の剣客というふ風采の髭面が、茶碗酒を手にじろりと磐音を見据えた。

「善兵衛どのはおらませぬか」

奥から妓楼の番頭めいた男が、慣れない長脇差をだらしなく腰に差して顔を見せた。

「旦那は、用足しに行っちょっとるたい。用心棒の一件ならたい、ちいと待ってくれんね」

と磐音に命じた。

磐音は土間の隅の上がりかまちに腰を下ろした。よく見ると新妓楼の内部はどこか弔いのような空気が漂っている。

土間に待つ五人の用心棒志願者のうち、ひょろりとした浪人が空の茶碗に酒樽から酒を満たした。

「もう底をついておる」

独り呟いた浪人は土間を見回し、磐音のかたわらに寄ってくると茶碗を上がりかまちに置き、塗りの剥げた刀を抜いて腰を下ろした。

年の頃、三十四、五歳の疲れ切った浪人だった。

「酒はぬまれぬのか」

「主どのにちと相談事がありましてな」

「用心棒ではないのか」

「事と次第ではそうなるやもしれません」

ちゃわんをちゅるちゅると音をさせて飲んだ浪人は、

「それがし、元豊後関前藩御番組、伊藤主膳と申す」

といきなり名乗った。

驚いたことに相手は、磐音と同じ関前はんの家臣であったという。だが、磐音にはまるで見覚えがなかった。関前藩は六万石、さほど家臣たちも多くはない。まず長年の奉公なら磐音がしらない顔は居なかった。

「それがし、永の浪人暮らしの坂崎磐音にござる。貴殿は近頃まで関前藩におられたか」

「わずか一年半前まで江戸藩邸の勤番であったがな、よんどころなき事情にて退転いたし、今も山野を武者修業の場としておる」

一年半前ならば、磐音も江戸にいて、神田三崎町の佐々木道場と上屋敷を往復するような暮らしをしていた。

伊藤主膳は、ただの騙り侍のようだ。

「えらく見世が暗うございますが、新妓楼なんぞありましたか」

「昨夜のうちに赤間の唐太夫が押しかけてきて、張り見世にいた遊女をそっくり船に乗せて馬関海峡を押し渡ったのじゃ」

「黙ってそれを見ておられたのか」

「唐太夫の連れてきた男どもが剣を抜いて一喝すると、用心棒どもは一斉に逃げ散ったとか。腰抜けばかりを雇うからじゃ」

「それで新たに雇われるのか」

さよう、と答えた伊藤はまた茶碗酒をちゅるちゅると飲んだ。

「岩田屋は、黒崎の博打うちの親分のところに子分を借りに行っておるのだ。人数を揃えて馬関の瀬戸を乗り越えて遊女たちを取り戻すというから、そなたも事と次第では助っ人の端に入れてもらえよう。こっちの腕は確かであろうな」

伊藤は片手を振って剣術の真似をして見せた。すでに己は人数の内に数えているようだ。

「剣術ですか。そこそこには習いました」

「俗に畳水練と申して道場稽古と実戦は違うでな」

伊藤は磐音に釘を刺すように言った。

そのとき、通りに駕籠が泊まる物音がして、

「旦那のお帰りですばい！」

と牛太郎と思える若い衆が声を張り上げた。奥座敷からさきほどの番頭が飛び出していた。

表戸から入ってきたのは、でっぷりと太った初老の岩田屋善兵衛だ。

眉間に皺を寄せた善兵衛は、土間の磐音たちを見回した。眼の下に黒ずんだ隈を作っているところを見ても善兵衛の苦衷が察せられた。

「黒崎の親分は色よい返事ば、しなさりましたか」

番頭の問に応えず善兵衛が、

「なんな、こん痩せ浪人どもは」

と吐き捨てた。昨夜の一件がよほど腹に据えかねているらしい。

「雇うちくれといいますもんでくさ、旦那ん帰りばはたせとったとです」

「昨夜ん腐れ浪人ごつ、大事んときに逃げ惑うただ飯食いじゃあなかね」

「待たれよ」

髭面の浪人剣客が善兵衛に言った。

「他人は知らぬ。それがし、宮本武蔵玄信が祖の二天一流の遣い手、立花十兵衛種高を、腐れ浪人とないがしろになさるか」

「ほう、大言壮語言いなさるばってん、まさかんときに慄えちょって遣いもんにならんこつなかね」

「武士に二言ござらぬ。よって十二分なお手当を頂きたい」

「先生」

善兵衛が表に声を掛けた。すると六尺三寸はあろうかという巨漢がのそりと新妓楼の広い土間に入ってきた。

ぼろぼろの野袴に草鞋がけ、薄汚れた袷の上に毛皮の袖無しを着ていた。さしもの高い天井も低く見えた。日に焼けた大きな顔は、無表情だ。

「こ、こん方ば、どげんしなはったとですか」

番頭が仰天したように見上げた。

「運がよかったかい。黒崎の親分が子分ばくさ、十人ほどかしまっしょちゅうて請け合うてくれた矢先にたい、長崎街道の黒崎口で、野太刀一刀流の達人の村上鉄蔵賀雲様が三人の剣術家ば相手に立合いばしなさるところに行き合うたね。いや、そん強かことは、魂消きった」

と言った善兵衛が、

「大きなこつば言いなはったばってん、いくら二天様の筋ちゅうてん、村上先生とはくらべもんにならんじゃろが」

と立花に言い放った。

「申したな、岩田屋。剣術は独活の大木のように大きければいいというものではない、技と肝じゃぞ」

「ほう、言いなはったな。よかろ、あんたらば雇うか雇わんか、村上先生に見てもらいまっしょ」

善兵衛が腕試しの上に採用の可否を決めると宣した。

「よし」

立花十兵衛が飲み干しの茶碗酒を鞘に吹きかけ、立ち上がった。

「試しは外でやりない！」

とすかさず番頭が叫び、まず立花十兵衛が外に飛び出た。

磐音と伊藤は思わぬ展開に顔を見合わせ、同時に上がりかまちから腰を上げた。

「そなたはどうするな、事と次第ではそれがし、ご免被ろうと思う」

伊藤主膳が怯えたように、のっそりと表に出て行く村上鉄蔵の背中を見た。先ほどの言葉は、村上を見たらどこかへ吹き飛ばんだらしい。

「まずは見物してからのことにいたしましょうか」

磐音はのんびりとした声で応じると表に出た。すると通りの片隅におまつの姿を認めた。おまつは磐音のことを心配したのか、立ち去れなかったようだ。

「おまつさん、まだおられたか」

と答えたおまつは、

「岩田屋はいよいよ追い詰められたようだねえ。この辺りで小当りに探ってみたら、長崎から連れ戻ったという上玉の若い女を含めて、遊女衆をそっくり赤間関に持って行かれたようだよ。情けないったらありゃしないよ」

磐音の胸が震えた。

おまつが聞きこんだことは奈緒のことではないか。

「長崎から連れてきた女が攫われたのは確かか」

訊き返した磐音を、おや、という顔をしたおまつが覗き込んだ。

「確かもなにも、そう聞いたよ。素人女のように初心な娘を含めてさ、船でそっくり馬関海峡を渡らされたとさ。赤間関は、出船入船で賑わう湊だよ。遊女衆は稼ぐだけ稼がされて、病に倒れるのが落ちさ」

おまつは赤間関の遊里をしているのか。そう言った。

「参る！」

立花十兵衛が右手の大刀を立て、左手の小刀を前方に突き出すように構えて叫んだ。

村上鉄蔵は、野太刀一刀流を名乗るだけに、戦国時代の業物の野太刀を無造作に抜くと上段に振り被った。すると袖無しの毛皮の前に革袋が下げられているのが見えた。

刃渡りは優に三尺を超えていたが、村上の巨体に振りかぶられるとさほど大きくも見えなかった。

間合いは一間半。

どちらかが踏み込めば、勝負をする間合いだ。

「えいっ！」

「おおっ！」

と気合をかけながら左右にお語句立花十兵衛に対し、村上鉄蔵は微動だにしない。

磐音は、野太刀一刀流という剣技を聞いたことがなかった。おそらく戦国時代の名残りの長太刀を使う実戦剣法の一つであろうと見た。

「独活の大木どのは、張子の虎か」

攻撃の間合いを計っていた立花はそう言い放つと、腰を沈めて飛び込んだ。

突き出された脇差が村上鉄蔵の袖無しの胸元を横に払いながら、大刀が肩口を袈裟懸けに見舞った。

場数を重ねてきた剣法は鋭い太刀風を見せた。

磐音は不動のカミムラ鉄蔵がゆらりと動いて、据え物斬りでもするように腰を入れて切り下ろすのを刮目した。

まるで立花の剣筋など眼中になく、ただ山が動くように野太刀が振り下ろされたのだ。

がつん！

野太刀が立花十兵衛の攻撃など委細構わず上方から斬撃すると、まず突進してきた立花の眉間がぱっかりと割れて、血飛沫が散り、二つの剣の刃が半ばから圧し折られるように切り飛ばされた。

磐音のかたわらのおまつが悲鳴を上げた。

立花十兵衛は、悲鳴を上げる間もなく、うらぶれた遊里の路上に倒れ伏した。

「見ちょったな。継はだれか、あんたか、あんたか」

岩田屋善兵衛が憑かれた両眼で磐音らを次々に見ると、伊藤主膳に眼を留めた。

「ほれ、あんたが試しは受けない」

「いや、それがし、ご免被ろう」

「なんば言いよっとな、こん期に及んで逃ぐるちゅうな。ただ酒ば飲んだろうもん、そん分、試しば受けない」

善兵衛は執拗に主膳に迫った。

「それともあんたはただ酒ば飲みにきたとな」

そうまで言われて伊藤が塗りの剥げた刀の柄に手をかけた。

そのとき言わねが、

「岩田屋どの、敵は赤間関の唐太夫一家にござろう。出入りとなれば、われらの手もいる。ここで同士討ちは勿体のうござる」

とのんびりとした声を上げ、慌てておまつが言わねの袖を引っ張った。

「なんな、あんたは試し受けんと日当だけ貰おうち魂胆な」

「そうではござらぬ。それがしが伊藤どのに代わって村上鉄蔵どのの据物切りを受け申そう。見事に一撃目をそれがしが躱したときは、われら五人を赤間攻めの一統に加えてくだされ」

「言いなはったな」

と狂気の眼で見た善兵衛が、

「村上先生、こやつにも頭天ば一撃喰らわさえてやっない」

と命じた。

血と死が漂う遊里の通りに、再び決闘の場が整えられた。

着流しの言わねは、春先の縁側で年寄り猫が日向ぼっこをするようにのどかにたった。だが、まだ、包平の鞘には手もかけられていない。

上村鉄蔵の無表情はまったく変わりない。

血に濡れた野太刀をゆっくりと上段に振りかぶり、磐音を冷たく見据えた。

時が静かに流れていく。

磐音の顔がかすかに紅潮した。

「なんばしちょっとね。猫の喧嘩でん、もうちったましばい！」

善兵衛が叫んだとき、磐音がふわりと不ごいた。

曲がりくねった路地奥に春風が吹き込むように、のどかに舞い動いた。

（斬られるよ）

とおまつは思わず目を閉じた。

村上鉄蔵の野太刀が据え物斬りに振り下ろされた。

その刃の下に長身を自ら置いた磐音は、包平の柄の手を離すとするりと抜けていた。

その直後、野太刀が唸りを生じて、春風が吹き抜けた虚空を裂いた。

「おのれ！」

といいう罵声が初めて村上鉄蔵から洩れた。

反転しざま、再び野太刀を上段に戻した。

「この次は、許さぬ」

「約束が違いますよ」

いつの間に摑み取られたか、磐音のてから村上鉄蔵の足元に革袋が投げられた。

小粒か銭がぶつかってくぐもった音を響かせた。

「よか、五人とも雇うちゃる。こんで、赤間の唐太夫なんち文句ばいわせんたい」

岩田屋善兵衛が叫び、磐音が、

「赤間関に乗り込むのは、いつのことにございますな」

と訊いた。

「こうなりゃたい、早いこつにこしたことがなかろ。黒崎からの助っ人衆は今晩にも来なすもん。ならば、紫川からたい、九つにも船に乗り込んで赤間関に押し渡りまっしょ」

「岩田どの、それがし、船頭町の旅籠の末広屋に泊まっておる。船着場で合流いたそうか」

「確かなこつな」

「武士に二言はござらぬ」

磐音がくるりと背を向けた。

「呆れた、坂崎さんには」

遊里を出た磐音におまつが呼びかけた。

「あの化物にてっきり斬られると思ったらさ、まるで風のように吹き抜けたじゃないか。薄目を開けて見たけど、革袋を掏りとった早業といい、坂崎さんは手妻使いかい」

「おまつさん、手妻といえば手妻、剣術なぞ騙し合いだからな」

磐音の声がのどかに小倉の町に響いて、

「腹が空いた。どこぞ夕餉を食べていこうか」

「また、あたしが酒を飲んで、坂崎さんが飯を掻きこむの図かい」

「今宵は少しだけ付き合おう」

「よしきた。ならばさ、小倉のとっておきの居酒屋に案内するよ」

と鳥追いのおまつが妙に昂奮した体で先に立った。